

子どもたちの農業体験学習推進シンポジウム

平成20年3月19日に東京都千代田区大手町のJAビルで、農業体験学習の推進をテーマに「子どもたちの農業体験学習シンポジウム」を開催しました。

<基調報告>

「教育の観点から提言する農業体験の効果」上智大学総合人間科学部 教授 奈須正裕

■学習指導要領の改訂と総合学習の時間



まず1年、2年生で行う生活科は、基本的に何も変わりません。総合の時間は現在、小学校では105時間、110時間、週3時間くらいの実施ですが、今回70時間、週2時間に削減されます。それを受けて撤退すると思うのかもしれませんが、そうでもありません。実は外国語活動を新設します。小学校5、6年に週1枠、年間で3

5、6時間です。主に英語です。小学校英語をやることと、総合が減ったことがリンクしている部分もあります。現在、総合で外国語活動、英語などをやっている学校が非常に多いです。9割以上の学校が週1時間程度、あるいは年間で15時間、20時間程度やっていましたが、それを切り離すわけです。その分が減りますから、実質的にそう多く減るわけではありません。

もうひとつは、今の学習指導要領には総合的な学習の時間を特別な章として記述していません。全体的なことを書いている総則というところにちょっと出してある程度です。今回、総則から取り出して教科、道徳、特別活動と並ぶ章立てをするという記述になっています。法令文書上、章ができるというのは明らかに格上げ、今回は指定席が出来たということです。それから学習の質の問題ですが、今回の学習指導要領では、習得、活用、探究という3つ子供につけたい力がありますが、その3分の1である探究は主に総合が担います。学力の3分の1は総合がやるということが明記されます。

だから時間が減って20年もするとなくなるのではないかという不安をお持ちの方もいるかもしれませんが、そんなことはありません。そのことは中学校も同じです。選択教科と総合がひとつの括りになって実数がきまっており、各学校がどのくらいそれぞれに使うか判断していましたが、今回、選択教科は消えます。選択教科と総合の選択で、総合が選り取られたのです。主に食農教育、農業体験を学校でやっていくということになると、中核は総合、生活科に

なるかと思えます。その時間は今後も安定して継続していくし、むしろ明確に位置づけて拡充していくということが、今回の学習指導要領の本当の主旨です。

では食農教育、農業体験をどんなふうにしていくかという話に移っていこうと思えます。食育法が施行されて以降、食育は広がりを見せています。ただ深まりや高まりというのはむしろ課題かなあと思っています。

食育がどれだけ普及していくかは、農業体験をやってないのがやるようになるということだけです。とりあえずまずは…ということから始める。最初はやっていなかったものとりあえず…。いつまでもとりあえず。ですから「そのうち」ではなくて初めからどういう質を目指していくか、何のために農業体験をするのか、どんな子供に育てたいのか、どんな地域にしていきたいのか、そのことを明確なビジョンを持ちながら、質をイメージしながらやっていくことが大事だと思えます。

■求められているアプローチ

ではどういう質を目指すのか。食育、あるいは食農教育でやられている3つのアプローチを整理しながら、どんなアプローチが求められているかを考えたいと思えます。1つは知識を享受する、体験を提供するというもの。2つめは躰をすることによって子供たちの望ましい行動を増やそうというもの。3つめは問題解決学習。子供自身が問題に気付いて何か解決の中で学びを深めていくもの。この3つのタイプの特色と問題をみていこうと思えます。

まず知識の享受、体験の提供は非常によくやられているものです。都市部の子供であろうが、中山間地や農村地の子供であろうが、体験は必要です。では知識や体験だけがあればいいのかというと、それでは弱いのではないかと。知識や体験を持っていても暮らしが変わらなければ意味がないのではないかと。栄養学の知識をいかによく持っていても、自分の食生活を調整できないと意味がない。目指すべきものとして子供たちの食生活に対する理解、それから地域に対する愛着も含まれていますけれども、そういうことが変わるような食育をしたい。知識の享受や体験は大事ですが、それは限定条件、必要条件ではあるけれども、十分条件ではないのではないのでしょうか。

2番目です。躰による行動調整。食に関わるようなことはわかってでもできるわけではない、だから頭を通さなくても体で覚えればいんだという論理ですね。これも一理あるかもしれませんが。でも学校で、あるいは皆さんがやって下さっているファーム授業の中でいろんな食に関わる学びをし、経験をしたとしても、家庭や日常の社会の中で同じような環境が整えられるとは限りません。そうすると、学校ではできるけれども家に帰ったらできないかもしれません。あ

るいは想定外の事態に応用がきかないかもしれません。そうなるとうも騾による行動調整は限界があるんじゃないかなと思うんですね。社会全体の変化に耐えうるような食育、食農教育をしたいと思うわけです。

■問題解決学習と食農教育

さて3つめの問題解決学習です。子供自身が問題を発見し、問題に気付いて、それを解決していく中で学びを深めていくという学習方法です。今まで見てきた知識の享受、体験の提供、それから騾に共通するのは主体の思考の欠如じゃないか。自分から発した切実な活動の中で骨身にしみて思い知らないと人間は本当には変わりません。自分から発した活動の中で骨身にしみて思い知るような学習を実施することが問題解決学習というやり方です。

まず、子供たちの求めから農業の体験と食に関わる活動を始めるとというのが、問題解決学習のひとつのポイントです。子供たちは総合の時間に自分たちの手でお米を作りたいと思います。多くの子供たちは消費者としてだけ食と結びついています。それを自分で生産をしたいという思いは子供たちが潜在的に持っているものです。もちろん子供たちも何もないところでやりたいとは思いませんが、総合的な学習の時間のような場があったり、何かしてみたいと先生が相談することで、「してみたい」と言い出す。それが食にまつわることや農業生産にまつわることであることでは非常に多いです。

例えば自分たちの手でお米を作りたい、そして世界のお米料理に挑戦したい。こんなことはよく子供たちが言い出すことです。ここで先生たちがよく勘違いするのは、上手にお米ができていくように準備してあげよう、全部段取りをしてあげようとするんですね。子供はお米作ったことないですから、おじさんたちが、あるいは学校の先生たちが周到に準備しよう……。これが違うのです。そうではなくて問題解決学習というのは、自分たちがやりたいことがあって、それをするにはどうしたらいいか、困った問題にぶつかったら、それを子供たちが自力で解決していく。もちろん、それを大人、教師や農業関係の方もサポートはしていただきますが、全部段取りせず、子供たちが問題の存在に気付いて解決していこうという動きに対して手助けするという形で大人が関わっていくということです。

例えば解決すべき切実な問題として、お米を作りたいと言った時「田んぼはどうするの？」ということが出てきますね。先に田んぼを準備しちゃったりしますが、それは間違いで、「田んぼはどうするの？」から始めます。子供たちが「あの田んぼは借りられないんだろうか？」「誰にどう頼めば借りられるんだろうか？」「実際にお手紙を書いて借りよう」という流れがすごく大事です。毎年5年生が田んぼをやると決まっていもいいのですが、でも「自分たちがやりたい」と校長先生にお願いに行くと、「いいですよ」という段階を踏む。そういうことが

すごく大事です。それによって子供たちが「自分たちの田んぼ」になるのですね。

農薬はどうするのだろう、肥料はどうするのだろう、水の管理はどうするのだろう、米作りを巡ってひとつひとつ解決しなければいけない問題、これは農家が直面している問題そのままですけれども、そういうことと向き合っていく。それによって農家がどんなことをいつも工夫し、苦勞し、考え、悩み、困っているのか、どんなふうに取り抜けてきたのかということと同じ目線になって考えることができる。だから身にしみて深い学びになるのです。

例えば農薬をどうやって撒こうかという時に、農薬を撒く作業はもちろん大人がやってくださっていいと思うのですが、でも農薬を撒くかどうかは子供が決める、考えることが大事です。その結果、農薬を子供たちが判断して撒く。すると翌日子供たちがMy田んぼに行ってみるとそこに虫がいっぱい死んでいる。自分たちが判断して撒いた農薬でこの虫が死んだということを知ることが大事。だから子供たちは「虫の命までいただいているんだ」ということで「お米を食べよう」になるんですね。また「虫の命までいただいたんだから立派なお米にしないと申し訳ないと」いう気持ちでやるんですね。そこに深い学び、身にしみる学びが生まれてくるのだと思いますね。

また、水の管理というのは自分の田んぼだけじゃないですね。「田んぼってというのは、うちの田んぼのことだけじゃないんだ。上の田んぼ、下の田んぼ、その上の川、ずっと下のこと、いろんなことが関わっているんだ」ということが見えてくる。もっと大きな視界で見えてくる。そういう自然と共生するいろんな知恵が田んぼや農地に見えてくるのですね。

自分で考え自分で判断する中でいろんな学びが生じてくる。だからこそ学びが自分のものになってくる。「食べ物があるのはただごとじゃないんだぞ」ということが身にしみて感じられる。「自然と共生する素晴らしい知恵がこの街にあるなあ」ということになってくる。「でも日本の農業は厳しい状況にある。これは自分たちの問題でもあるから何とかしなきゃ」・・・という思いで田んぼをやっていくわけですね。こういったやり方をするのが問題解決学習というやり方です。

なかなか難しいですけれども、ただ体験をする、ただ寝けるのではなくて、子供たちが自分たちから発した思いを実現しようとする中でいろんな問題にぶつかる、それを解決する、それを大人がサポートする、その中で身にしみる深い学びをとっていく、それが僕らが目指す食農教育ではないかなあと思いますね。

■問題解決学習の3つの原則

問題解決学習の3つの原則、3つのポイントをお話しようと思います。3つの原則というのは、問題は子供が解決するという原則。本物を目指すという原則。意図性や指導性は発揮するという原則。ひとつずついきましょう。

一番目の問題は子供が解決するという原則ですけれども、「子供の求めを大事にしてください」と言ったら、多くの学校の先生や地域の方々が「子供の求めを実現するなんて準備だけでも大変じゃないですか」とおっしゃる。これが違う。準備は子供たちが米を作りたいのだから子供たちが原則やる。子供たちだけではできませんけれども、子供たちが中心になって、それを後追いする形でお手伝いする形で大人は関わる。先回りするとかえってうまくいきません。人は、うまくいかないから学びます。だから困ってうまくいかないといいのです。活動が滞る、出会う困難や失敗が学びの契機です。だから困らせてください。学習というのは終わっちゃいけない。このことは次どうなるのだろう、このことがわからない、このことやってみたい・・・どんどん続くようにしなければいけない。願っていることが必ずしも順調に進まない、困難、失敗に出会う、それで「ああそうか」とわかったり、「じゃあこれはどうなんだろう、もっとこんなことをしてみたい」って広がっていくのですね。

皆さん方は、お子さんが農業体験をしたり、食べ物作りすることがうまくいくようにサポートして下さろうとし過ぎるあまりに子供たちが出会うべき困難や失敗にぶつかっていない、だから学んでいない。ただやってみただけに終わる。そういう意味で活動支援することが活動を妨害することになっているということをお考えいただければなあと思います。

2番目です。本物を目指すということです。農業体験、いろんな食べ物作りの活動をして下さる時に子供用にしようとしてはいけません。本物を目指すから学びも本物になります。

例えば子供たちが大豆を育ててお豆腐を作るという実験がありますが、最初はうまくいきません。小さいカスみたいなお豆腐を作って「先生お豆腐できたー！」って持ってきますね。それで先生や農協の人たちが嘘言っちゃいますね。「まあ、立派なお豆腐ができたね」なんて。子供は「ああそうか。あの親父30年修行しないと立派なお豆腐できないって言っていたけど、たいたことないよ」って大人をばかにしますからね。だめなものはだめって言ってください。

ここで大事なことは子供がもともとお豆腐を作りたいと思っていることです。最初から子供が求めるから、うまくいかないとき、リベンジに持ち込めるのです。持ち込めるようになったら、「本物を目指そう」。お豆腐屋のおやじさんみたいな四角いお豆腐まで頑張ろう。みんなならできるから、先生も一緒にやるから。それがすごく大事です。もちろん繰り返して何度も何度も

しつこくやるということが大事です。

そうすると例えばお母さんと夕食の買い物に行くときも、お豆腐に目が行きます。いつも買っている49円のお豆腐じゃなくて280円のお豆腐があるけど、どう違うのか気になります。そこで280円の方を買って食べてみてびっくりします。全然味が違う、感触も色合いも違う、なんでこんなに違うのだろう、となります。子供はそこで食品表示とか調べるわけですね。すると当然使っているものや材料、製造工程が違います。それでお豆腐屋のおやじに聞きに行くと「それは違うよ、大体うちは天然にがり使っているし、材料が違うでしょ？うちは国産丸大豆だし・・・」と聞かされるわけです。「国産じゃないのを使っているのかな？大豆ってどこからきているのだろう？」と調べると、90何%海外から来ている。豆腐みたいな食べ物が外国に依存しているということに、切実な自分の問いとして気付いていくのですね。

本物を目指すことで学びも本物になります。子供の目線が農家の皆さんと同じ目線、同じ問題意識になってくるのですね。もちろんハードルは高いし何回もやり直しますが、本物を目指す。それはすごく大事なことかなあと思います。

最後です。意図性・指導性の適切な発揮ということです。子供主体で農業体験、子供中心で農業体験をやるということ、総合の時間と生活科というのはそういう教育です。子供の思いや願いを自力で実現していこうという中でいろんな学びが体験的に起こってくる、思い知ることですけど、それは時々誤解があります。子供の思いを大事にするというのは、ただ子供を好き勝手にさせるとか、迎合するということと誤解されることがありますが、そういうことではありません。先生方が出るところで出る。

子供だけでは気付かないことに気付かせていくという意図的な戦略もすごく大事だと思います。ただ知識や体験を体験するだけではだめ。子供たちが自分の頭で考え自分で解決する。自分で解決してその中で自分に身にしみて解決していく。それを振り返って自分で生き方を深めていくような・・・問題解決学習という言い方をしましたけれど、そういう学びを是非作っていただきたいと思います。

<研究報告>「農業体験学習全国定着化推進ワーキングの研究報告」

農業ジャーナリスト 榊田みどり

今回のワーキンググループの研究で実際に現場を訪ねさせて頂きました事例の3カ所について、簡単にご報告をさせていただきます。

■JA山形おきたま

まず一カ所目。JA山形おきたま飯豊地区の米沢支部の取り組みです。ここは2004年度から東京都内の新宿区内2校で出前授業を始めた青年部です。どうして東京かというと、何らかの人脈があったわけではなく、「東京で稲作体験をやりたいな」と青年部は思い、ダイレクトメールをいかにも農地がなさそうな新宿区などの小学校に片っ端から送ったそうなんです。100通くらい送ったそうです。「怪しい者ではありません」という意味も込めて、「はえぬき」の種籾も一緒に「自分たちはれっきとした農家。一緒にはえぬきを育てませんか？」というメッセージの手紙と送ったら、100校くらいの中から2校、総合学習の中で稲作体験をやりたいと反応があったそうです。この2校から出前授業を始めました。



青年部が始めた時に、この農業体験を通じて何を伝えようか、何を目的にしようか、ということを最初に話し合っています。大きく分けて2つです。稲作体験を通じて感謝の気持ち、もったいない心を育てようというのがひとつ。もうひとつは交流を通じて山形の地域を知ってもらいたい、農業文化の魅力を知ってもらいたいということ。この2点を目的に据えながら出前授業の伝え方、子供たちとの接し方を考えていきました。

出前授業は兼業の稲作農家の方が多いのですが、往復をしなければならず、時間もお金も掛かるので大変です。1校につき年間最低4回。播種、田植え、稲刈り、収穫祭。東京へ行って指導をして帰って来る。4回では足りないなのでその間の指導は、インターネットを通じて相談を受けたら答えるというようなコミュニケーションを取るという形で進めています。2006年からは稲作体験をやっている小学校の方が地元に行きたいという移動交流の形になりました。足立区の上沼田小学校の先生と生徒たちなど、今、受入れは3校になっているそうです。

大変面白いなと思ったのは、稲刈りです。最初に子供に対してどういうことを伝えたいかを考えている目線だからだと思うのですが、どうやったら子供に伝わるかという工夫がいろいろとあります。まず手刈りで子供達に体験してもらおう。その後にコンバインに子供にも乗ってもらって、コンバインでの収穫体験をしてもらいます。手刈りをするとうるちを刈るというのがどうい

作業か、当然わかります。大変です。今度は機械を使うとこんなに早いんだということもわかります。手作業でやる作業をコンバインという機械が2つ一緒にやっけてしまいます。「コン」というのが「2つという意味」という機械の説明もちゃんとします。稲を刈るという作業、もうひとつは種籾の脱穀作業という2つの作業をする機械ですという説明をして、その上で機械での作業を体験してもらおう。そういう手順を踏んでいます。非常に丁寧だと思ったところです。

よく私農業サイドの方から今時手刈りをしている農家は殆どいないと聞きます。やっぱり今の農業の姿を伝えたいという話を聞くのですが、学校サイドはやはり昔ながらの手刈りというところにこだわっていらっしゃる方が多くて、そういう意味では見事に融合した形があるやり方を見せていただきました。最初から機械にいつてしまうと、子供にとっては稲刈りというのは機械がブラックボックスに見えてしまって何をやっているのか全然わからなくなってしまうので、やはり刈り取りの苦労を少ししてからという形を取るのがいいのかなと思います。

それから手刈りの稲を束ねる実演を見せているとき、結わえているおじいちゃんは飯豊町の出身者ですが、東京在住のおじいちゃんです。東京飯豊会という飯豊町出身者の会がありまして、出前授業もこの方たちの協力を得ながら一緒に進めているということです。だから皆さんで手が回らないところは東京にいるこういう方たちをお願いをするといいですね。

最後に収穫祭です。播種、田植え、稲刈り、収穫祭の4つのうち、一番重視していたのがこの収穫祭です。1年間稲作体験してもらった上で最後に伝えたいことと言って、必ず受け入れているお子さんたちにお話しているのは、「農＝食＝命」という公式です。体験した後だからこそ子供たちに響くのかなあとと思いますが、逆に言えば農業者サイドとしては食べるということとつなげて農業を語る、いのちとつなげて農業を語るという意識が大事ということを感じさせて頂いた事例です。

継続して行く上で予算の問題は結構大きいわけですが、一年目はほぼなかったみたいです。カンパで捻出して、最初は2校、夜中2時くらいに山形を出て2校午前、午後と回ってその車で山形へ帰るというよう強行軍でやっていたそうです。それで県の予算をもらって、とりあえず今は3校なので1泊2日で東京に来て1日泊まって帰って足が出ない程度です。宿泊の予算がないと内緒で学校に泊めてもらったり、なかなかお金の面でご苦勞が耐えないなあと思いました。

■JAかみつが

2カ所目です。栃木県のJAかみつが日光キッズクラブというところです。年間に5回アグリスクールを開催するのが基本です。小学校3年生から6年生が対象で、定員50人で2003年

から今まで5回行われています。面白いのは、メッセージ性を意識したプログラム作りをしているところです。毎年必ず地元の品目を1個、テーマに決めて、その品目に関しては根作りから収穫、食べるまでを一貫して行うということを意識してプログラムを作っています。

去年私たちは大根の2回目の教室の時にお邪魔しました。まず4月に畝作り、8月に種まき、9月に間引きして、11月に収穫して、12月に料理をする、5回を教室として行っています。8月の種まきは夏のちょっと暑い日だったので、氷水でひやひやかに冷やしたきゅうりを女性会の方たちが作ったお味噌で食べる「きゅうりビズ」がありました。これで体を冷やしてもらおう。そういう遊び心みたいなこともありました。

8月のバーベキューをやった後にやっているクイズでは、バーベキューをやっている間に、日光キッズクラブの事務局をやっているJA職員の女性が1人で畑に戻って葉っぱを持ってきて、「これは今食べた何の葉っぱだと思いますか？」というクイズをやっています。茄子とかかぼちゃとか、ピーマンの葉です。「野菜を穫った時によーく観察していた子はわかるはずだよ」と言いながら見せるのですね。子供たちはわかっていました。

大きな特長は5回の教室、農業体験だけではなくて、「今回はこういうことも伝えたいよね」というコンセプトをはっきりと考えてやっていってほしいところです。もうひとつは必ず最後は調理体験があるところです。調理も大根であればふろふき大根、煮る、サラダ、大根餅、いろんな食べ方をこの調理体験では体験してもらいます。いろんな食べ方を伝えていくことは、子供たちにとって楽しみにもなりますし、食べる技術も楽しみながら覚えてもらおうという意図も非常に強く出ます。主体になっているのが女性会です。日光かみつがの場合は支部が5つありまして、年間5回の取り組みですから5支部でそれぞれ年間1回分の担当になって子供たちの指導をしています。食事中に葉を見てもらうとか、調理体験を重視するとか、食と農業体験をつなげていこうという意識を持った台所的な発想がよく出ていると思います。

予算はまず参加者から徴収します。年会費は千円。50人定員ですから5万円ですね。5万円では回らないので、調理体験の時にはひとり300円くらいの実費を貰う。そのほか農政改革協議会など3カ所から少しずつ貰って大体年間30万くらいは確保していると聞きました。それでも結構きつみみたいで、来年度から女性会の事業として組むそうです。

■JA菊池青壮年部

3つ目の事例です。熊本県JA菊池青壮年部旭志支部で行っている中学校1年生が1泊2日で地域の農家にホームステイをするという取り組みです。1993年からなので、15年前から継続している事業です。中学校にも総合的な時間がありますが、中学生にとって農業体験

の位置づけというのは結構希薄になっている気がします。農業者サイドでも、最初に取り組み相手と考えるのは小学校、幼稚園、保育園というところが多いのではないかと思います。中学校はどうなんだろうということでおじゃまさせていただいたのがこの旭志支部です。

旭志支部のある旧旭志村は酪農畜産地帯で人口は5,500人くらいなのですが、人口の5倍以上牛がいる酪農畜産の地帯です。旭志中学校の1年生の3割が専業農家のお子さんたちで地域自体の農業が主幹産業であるという意識の強いところですよ。だから地域ぐるみで地域の子供は地域で育てよう、地域の後継者は地域で育てようというそういう意思が非常にはっきりしていて、農協さんとか農業者だけではなくて、旭志中学校の教育関係者の方たちも非常に積極的に賛同して農業体験を教育にいっぱいという姿勢です。

具体的に言いますと、学校が1泊2日のファームステイを総合的な学習の時間に位置づけて行う。ただとまるだけではなくてファームステイの前に8時間、終えてから8時間、きっちり事前学習をして、終わったら振り返って学習発表会をやるという時間を取ります。事前学習の時は前の年までのファームステイがどんなだったか、学校の先生たちが撮ったビデオを子供たちに見せてファームステイをするなら飼育農家がいいか、養豚がいいかなど、第1候補、第2候補をあげ、学校の先生が調整します。それが決まったら子供たちがよろしくお願ひしますというお手紙をホスト農家に書いてもらいます。

学校側がこのファームステイの目的は3つあります。ひとつは旭志の主幹産業である農業の理解を深める。もうひとつは同じ旭志の人間として地域の中で人間としてのあり方、3つ目が生産の喜び、働くことの大変さをしっかり学ぶ。職場体験的な意味での位置づけです。この3点を学校側が子供たちにきちんと話をしています。

農家は泊まってもらう時にはなるべく自然に自分たちの生活を見せることに非常に気を使っているらしいようです。これは15年続いていることもあり、すでに1期2期でファームステイを体験した子供たちが今度は就農して受入農家になっています。今までに大体この体験で、921人が体験し、もちろん自分のうちが農家ですという子供が多いのですが、10人以上が後継者として農業を継いで、恩返しも含めて受入れ農家の役割を担う立場になっています。ファームステイの経験が農業を志すきっかけのひとつでもあったという話もなっていたので、小学校から中学校で職業としての農業というのを親の仕事と見比べながら農家の泊まりながら体験できるというのがひとつのきっかけになっているのかなあと思いました。

予算は、学校側でもJAの方でも特に取っていないということです。受入農家さんが基本的に青年部の役員。1泊2日ですから親戚の子が1日泊まりに来たという感じで晩ごはんと一緒に食べてお手伝いをしてもらってという形なのでそれほど負担はないと…。学校から謝礼

のようなものも若干送るというような話がありましたけれども、お互い無理のない形で続けられていました。

■3つの事例を通して

共通する点だけいくつかまとめてお話ししたいと思います。ちょっと今の旭志のファームステイに関しては少しずれるかもしれませんが、「伝えたいことは何だろう」と農業者のサイドで議論をし、明確にするという作業を行っていることが非常に大きいですね。だからこそ農業体験を通じて子供たちにメッセージを送ることができているのではないのでしょうか。それから農業体験だけではなくて食の視点を大事にすること。育てて食べる。食べることと農業体験をつなげているところが2点目。3つ目は伝えることをどうやって伝えるかということ子供たちの目線に立った工夫をしていること。4点目は、お金の問題とか人が足りない、時間がない、場所がない、だからできないという話はよく聞きますが、マイナスの話はあるけれども、この問題はこう解決すればできるというような、プラスの方向に転化する発想を皆さん持っていらっしゃると感じました。最後になりますが、やはり学校との連携は大きいです。総合学習の時間を先生たちも活かしてくれる、あと農業体験を教育的な視点から子供たちに活かしてくれる、そうした先生たちに出会うと体験が生きるということも共通して感じられた点でした。

<パネルディスカッション「子どもたちの農業体験を進めるために何をすべきか」>

パネリスト＝JA山形おきたま青年部副委員長 高橋勝氏・JA菊池青壮年部前委員長 霍田^{つる}崇氏・徳島県阿波市立市場小学校教諭 藤本勇二氏・上智大学総合人間科学部教授 奈須正裕氏
コーディネーター＝農業ジャーナリスト 榊田みどり氏



榊田 農業体験、食農教育をどうしていくかということが大きな課題になっていくと思います。今日は教育サイド農業サイド両方の方に本音トークでどういうことをしていきたいのか話をしていきたいと思います。

■農業体験の実践について

高橋 JA山形おきたま青年部、高橋です。盟友数は800名で活動しております。東京での出前授業は私が立ち上げた当事者というようなこともありますので、その苦労話、どんなことをして進めてきたかという工夫を率直な意見としてお話できればなあと思っております。



霍田 JA菊池の青壮年部の鶴田と申します。七城支部の「ファームスカウト学校」の報告をさせていただきたいと思います。これは青壮年部で独自でやっている事業です。JA菊池の8支部全体でやっているという形はとっておりません。8つの支部が各々自分たちの支部で食農教育をやっています。七城支部はファームスカウト学校ということで平成10年から、やっております。スタート当初は町と合同でしたが、合併致しまして、平成11年から完全に青壮年部だけの事業という形になりました。初日が集団宿泊、2日目の昼過ぎから農家の民泊という形で体験してもらいます。地元の第3セクターとかに場所とかいろいろご協力をいただいておりますが、お金の問題から人的な問題まで、すべて自分たちでやらないといけない状況です。

藤本 徳島の阿波市立市場(いちば)小学校6年生B組担任の藤本勇二です。なんで僕がこの席にいるかというと、子供たちが地域のことを知らなさ過ぎるからです。気持ちが全部東京に向いているんですね。そういうことに気が付いた時に桜餅を作るために田んぼで米を育てました。豆腐や納豆やきな粉が大豆から全部作られているんだという食文化に触れさせたくて大豆を育ててきました。こういう学習というのは教師ひとりでは絶対できないですよ。田植えもやったことないですし、もちろん豆腐なんて作ったことがありません。地域の人に教えてもらって一緒にやらないといけないのですが、そういうのをやっていると農家の人のやっていることってすごい素敵なんですよ。何が素敵かというと段取り力ですね。何か煮炊きしながらその傍らで畑



行くみたいなことですね。しかも野菜や稲と対話ができるという…。超能力だと思うのです。あと天候を見ながらその日その日の仕事を判断していくという判断力とか、そういうのに出会うたびに、ああ農家の人って素敵だなあと、教師の僕がとにかくわくわくどきどきして、それで食農教育をやってきたんです。そうすると30歳を過ぎてこんな学習を始めたのですが、今ではそばも打てますし、豆腐も作ることができますし、手もみ茶もできます。僕がわくわくやっているのを見ていると子供らにもわかるんですよね。子供たちに地域が素敵だとか、地域には誇りがあるんだよということを教師が語るよりも、具体的に子供たちが地域に愛着を持っていくということ、そういうとこに触れていくと、こういう学習がどんどん楽しくなって、ということでここにきています

奈須 私自身は学問や科学や教科の勉強と同時に暮らしの勉強があるんじゃないかということはずっと考えていました。暮らしの勉強をどうやるかと考えた時に食べ物というのが一番良い、子供の関心があるなあと思いました。では食べ物、食の勉強をしていこうとした時に、生産というのが欠けている、消費とだけ向かい合っている、これはまずいなあと。そこから食農というところに入り込んでいきました。



■課題をどう克服したか

榊田 まず農業サイドのお二人から実際に今まで農業体験をやってきた中で課題となっていること、実際にそれを解決できていたとしたら、どういう形でクリアしてきたかということをお話していただきたいと思います。

高橋 何か新しいことをやろうとした時は本当にいろんな抵抗があったり、ゼロからの準備ということで苦勞、苦勞でした。100%準備してからスタートということではなかなかできないのが現実です。まず6、7割くらい準備ができれば、もう前に進んでみる、問題があっても解決しながら進めていくという方法を私たちは取りました。もうひとつ大事なものは、明確な目標設定だと思います。小学校に対して、青年部の全員に対して、こういうふうな考え、こういうふうな思いがあるからやるんだということで、私たちは盟友一致団結して活動を続けてきたという経緯があります。授業の中では、子供たちに極力考えてもらう、何から何まで自分たちがあしきょうこうしようじゃなくて、ある程度ヒントを与えて考えてもらうということと、あとは稲作というのは全然経験したことのない未知の世界の勉強になるものですから、どうやって子供たちに興味を持ってもらうのかという部分、この2点を工夫というか考えながらやってきました。

霍田 今アグリキッズスクールみたいなことが全国的に行われています。私たちは10年間やっていますが、これは非常にエネルギーがいります。それと何から何まで全部自分

たちで動かしていかないといけないので勉強になります。ものすごくいろいろな面で。農業以外のことでも。もうひとつは費用の問題ですね。私たちは「子どもゆめ基金」を利用させていただいたり、町とか市の協力をいただきながらやっている状況です。非常に子供たちは喜んでくれるし、アンケートを見てもリピーターの方が非常に多いです。ただし定員は30で止めています。それは結局目が届かないからです。うちの盟友数は80人弱います。七城支部は人口5千人くらいの小さな町ですけども、そこが限界だろうということです。ただ非常に目的意識を持ってやっているのもこれはこれでいい授業だと思います。

なんで総合の時間に入っていったかという、端的に言うと学校側と農業側の目的が一緒であればお互い寄り掛かってという言い方がおかしいですが、いいところを、専門分野を出し合いながらやればいいのではないかなと。その先にはもちろん農業の未来も見えてくるのではないかなと。遠回りみたいですけど、実はこれが近道じゃないかなということで、去年一年間、5年生の総合の時間でほとんど使わせていただきました。コストも掛からなくて結果は出ますのでいいやり方だなあとということで、今後取り組んでいこうと考えているところです。

■「総合」での取り組みの留意点

榊田 総合で学校と組んだ方が負担が軽くなるという部分があるということですね。藤本先生、教育サイドの立場から実際に今まで総合学習をやってみてぶつかった壁とか、農業者の方と組んだ中で感じていらっしゃることをお話していただけますか。

藤本 高橋さんと鶴田さんが農業者の立場から言ったことが僕らの方から見ても当てはまりますね。まず反省も含めて言えば子供たちに考えてもらうとか、興味を持ってもらうことを大事にするということが…。農家の方はすぐ種蒔きするんですよね。「はい、畝に並んで、はい植えるよ」って始めちゃうんですよね。多分それは当たり前になっているからでしょうね。その一



粒の種から、あんな小さな種から大根ができるなんて、子供は考えただけでわくわくする。その大事な場面を忘れて、「はい、種蒔くよ、蒔いたでしょ、水やって」…と世話に入っちゃうんですよね。そこら辺をもう少し興味を持ってもらったり、考えてもらったり、想像してもらったりすること、そういうのは打ち合わせが大事だということです。

最初の頃は農家の方に丸投げをしていました。そうすると農家の方って喋り出すと止まらないんですよね。寡黙なんですけど、畑で鋤とか道具を持たせて喋り出すと止まらない。自分のフ

ィールドでしょうから、そうすると「命はね・・・」とか、「感謝の気持ちを持って、自然の営みの中で君たちは生きているんだから・・・」なんていうことを言うんですね。そうするとどんどん子供がひいているのがわかる。でも農業関係者の方は一生懸命喋っている。その誠実さというのは子供がひいても感じない誠実さなんですよ。ですから時間の割に効果が上がっていない。ですから「ここまでは話してください、ここまでは僕のほうで分担しますから」というようになりました。これは経験で身につきました。

榊田 授業の中で農家の方たちを生かすコーディネイトをご自分でなさっているんですね。それが教師の役目なのか、それとも農業者側で考えることが必要なのか、学校と関わっていらっしゃる鶴田さんと高橋さん、その点について伺いたいと思います。

霍田 今先生がおっしゃったとおりですね。総合の時間に呼んでいただくんですよ。でもね、単発なんです。1回きり。そうするとさっきみたいな話になるんです。先生たちと打ち合わせしますと、これも話してください、あれも話してください、これは話せないよという状況で、40分で話してください……。土台不可能だから俗に言う自爆ですよ。先生ももう呼ばない方がいいなあ……。結構これあるんですよ。ここでちょっと垣根ができてしまうという部分があるんです。今年よかった点は、1年間通してスポットでアドバイスなり、子供たちが持った問題について話をしていくというやり方で、これをやったら非常にスムーズにいきました。

榊田 受ける側も1回となると自爆するということでした。高橋さんいかがですか？

高橋 東京への出前授業ということで2時間分を取ってもらってやっているのですが、先生も田舎の体験に対してまっさらなので本当に私たちの話をまじめに聞いていただいて理想的に近い学校、担任も含めてなんですが……。

榊田 なんでも言うことを聞いてくれる？

高橋 はい。先生と前もって事前の綿密な連絡というのも十分に取っていかないと不安なので、事前にいろいろな連絡はメールなどで取りました。本当に学校に対して不満はないです。

榊田 綿密な連絡をちゃんと取る。先方も分からないながらすぐ連絡を取ってくれるという。来年度から地元の小学校でも始まるという話をちらっと伺いましたけれども、地元の先生は……。

高橋 逆に地元の小学校の方が丸投げしたくてしょうがないんですね。今までは児童の保護者の方が先生として教えていたのですが、お父さんお母さんも稲作を教えられなくなってき

ている年代といいますか、農村地帯なんですけど、私たち30代、40代前半の保護者の方が稲作を指導できなくなっていて、青年部できないか？ということで、私たちはサポート的にやることになりました。メインは地元の一般の方に公募します。学校で公募してもらっているのですが、地元の力を使って地元の小学校を守っていくとか、盛り上げていこうという考えです。

榊田 丸投げの話も出ましたけれど、奈須先生、農業サイドと教育サイド、どっちがコーディネイトしていくかについて、どのように見ていらっしゃいますか？

奈須 より強く目的意識を持ったり、戦略を持っていたりする方がけし掛けていくのだと思いますね。その地域、その場で強いパッションと切実さを感じている人が仕掛けていかざるを得ないのだと思います。とにかく一人つかんでそこからわかってもらって輪を広げていくという戦略で、ゲリラ的にまず始めるといことしかないのだろうなということがひとつです。それから、農業関係の方が学校との関係で果す役割って2つあると思います。ひとつは農業の作業とか生産ということ、体験そのものの場の提供、ご支援で、もうひとつがその意味について語るということです。意味についてだけ語るとなると、さっき霍田さんがおっしゃったように自爆しちゃうんですね。それは多分小出しにするとか、理想的にはそれを農業関係者が言わないで、子供が言うことですね。おじさん、僕思うんだけど…って。先生も言わない方がいいです。先生たちと農業関係者でどうやって子供に言わそうとするかと仕組んでいくことですね。

榊田 子供に言わせるような工夫が必要となると、かなり高度になってきますね。学校の先生が関わってこないとなかなか難しいことでもあるかなと思います

藤本 それが先程奈須先生の講演の中にあつた子供の問題解決ということだと思うんですね。結果として農業関係者の方も教師も子供たちに気付かせたい価値のある内容、事柄を、例えば命の大切さとか、自然の営みの素晴らしさとか、そういうことに子供が気付くようにどうやってやるかということが、僕らに問われていることだと思います。例えば野菜の好き嫌いということも学校の教室の現場でいれば一番よくわかるのですけれども、カロテンがどうか、ビタミンCという話も確かに必要なんですけど、やっぱり自分で育てた野菜は食べますよね。それは時間も掛かる、世話も掛かる、人の手も必要、地域の人と一緒にやらないといけない、ずいぶん労力を使う、でも回り回って結局行きたい、行かせたいところ…野菜食べてね、お米しっかり食べてねというところに最終的に行っちゃうんですね。それは子供らが自分で歩いてそこに行くんですね。この辺りのことが農業関係者の方はちょっと直球過ぎますよね。

榊田 ある程度ポイントポイントで時間を取っていただくような仕組みというのも多分必要になってくるのでしょうか。だからお互いの話し合いということも必要だと思います。霍田さん、子供たちに伝えていく手法として学校と組んだ方がある意味やりやすいなとお感じになっている

んでしょうか？

霍田 箱もの型の授業が悪い訳ではありません。これは多種多様で全国津々浦々いろいろなやり方があるからそれでいいんですね。そこに合っていればいいのです。そのまま真似てやるのが一番いけないのであって…。

藤本先生からありましたけれど、農業の場合、どうしても直球です。食農教育はJA菊池も食農教育の推進ということで18年、19年、20年、3か年計画で新年度から始めますが、食農教育とか食育というのはあんまり広すぎて何をやっていいかわからないという状況ですね。その場合、JA菊池なら菊池の物を買ってくださいという話になっちゃうと、もう全部どん引きになっちゃうので、それでは全然よくない。そこで「総合」を去年一年やってみて非常に効果的だったので、これはやらない手はないな、と。2つ、3つ、4つの小学校くらいから広げていけばそれでも十分なので、こっちも準備がありますので…。全て整って始めようと思つたらなかなかできませんので、ある程度見切り発車的なことでやっていかないと、という感じです。

藤本 子供たちの立場から言っても、JA菊池の米に関心があるんじゃないですね。霍田さんと一緒にやると霍田さんが作ったお米っていいなあってなっていくんですね。人への関心、高橋さんといろんな学習をしていくと、やっぱり東京の子は山形にきつと思いをいたすんですよ。山形の天候どうなのかなあ？と絶対思いますよ。そうすると霍田さんが言うような周りへの発展、結局それが販売促進になっているんですよ。その辺りのことをなんて言うか、もう少し回りを埋めていくことが大事だと思うんです。

■学校との付き合いの留意点

榊田 他のJAさんでもお金に繋がらないと組織としてなかなか動けないという本音を聞くことがあります。そうすると学校の方はひいてしまうという、そういう不幸なミスマッチもあると思います。高橋さんは山形の地域情報、やはり「はえぬき」を東京の人に知ってもらいたいということもあったと思いますが、学校とはどういう付き合いを心掛けていらっしゃるのでしょうか。

高橋 なんで山形から東京にやっているのかというと、自分たちの農産物のPRということは本当に奥底にはあります。だけど学校という教育の場で今言った直球は投げられませんので、やっぱり巡り巡って自分たちに返ってくるような仕掛け作りが必要なのかなあと思っています。実は私たちの場合は教育の場だと今言った「物を買ってくれ」と言えませんが、たまたま来ていた保護者の方が山形の農産物を東京のお祭り、小学校を解放した盆踊り、夏祭りで飯豊町の農産物を売れないかという話から始まりました。小学校の町内会の方々とうまく連携を取って私たちの農産物の販売の場を提供していただいて販売できました。

■予算の確保

榊田 お金は後からついてくるということですね。もうひとつ予算の問題ですが、これはどうなんでしょうね。学校サイド、教育サイドの方である程度協力をいただくというのは無理なのでしょうか。

奈須 ちょっと考えづらいですね。今、保護者の皆さんも難しく、教材費をペイすることに対して抵抗する親もいて、難しいかなあとは思いますが。農業体験もそうだし、農家でやる教育ファームというのもすごく農業者に対して負担を強いていることが多いと思います。これはずいぶん大きな問題だと思います。ただ農業のいろいろな助成事業を当てにしちゃうと助成がひきあげられちゃうとやれなくなるという話になります。

藤本 学校の中では若干の実習費を確保しています。2月、3月に今年度の実績を踏まえて。だから学校の中でも予算上は子供たちが米作りをすることはできあがっているのですね。でもそれで全部賄えるかと言うととても賄えません。うちの学校でもやったのですが、田んぼを借りて、子供たちが育てたお米を道の駅とか、学校の中のバザーで売って、バザーの収益で……。あまりいいお米でなくても親って買ってくれます。おばあちゃんが孫のためなら買ってあげてって宣伝してくれたりね。情けにすぎるところがあるんですけど、そういったことでこれだけの肥料代が必要でしたからお返ししますというようなことをしています。結局は熱心な農家の方にすぎているというのが実情ですけどね。だからこそ僕はJAさんに頑張ってもらいたいと思うんですけどね。

霍田 残念ですけどおっしゃるとおり。実はうちは小学校と中学校がふたつ並んで建っています。1小1中です。学校で30m×100mの田んぼが2枚あり、総合的学習の予算で学校に対して補助が来ていたんですよ。ただ合併いたしまして、ほとんど一律カットになってしましまして、実は昨年始める前に「予算がなくなりました」と先生に言われました。先生方は予算が無くなったら仕方がないという。それで教育委員会に行くというのもあれだから、「だったら先生米を売りましょうか」と……。今まで売っていなかったんですね。田植えして稲刈りして終わりだったので、売りましょうと。子供たちに米を売ってみるか？と言ったら売ると。子供はただ売りたいのでしょう。売るとなったら表示がありますよね。先程ありましたけれど、バザーじゃちょっと甘いと。売れるだろうけど、それじゃいかんだろうということで、別の販売の場所で売らせました。パワーポイントを使って3種類くらいラベルを作って、どのラベルが一番売れるかなということも子供たちが自分たちで考えてやったんです。裏の表示も全部印刷してラベルを貼って。でも見事に売れませんでした。子供に後で感想を聞いてみると「子供が売れるから売れると思っていた」と言う甘い考えがあるんですね(笑)。ところがそんな簡単にいかないです。それから、どうしたら売れるかという勉強をし、ラベルもひとつに統一して、今度のご褒美でバ

ザーで売られました。子供たちも自分たちがやっていることが新聞に載ると嬉しいし、先生方も嬉しい。校長先生も鼻高々だから、それで良かったのかなと。災い転じて福と為すじゃないですけど……。一応予算の方はまた復活するということになりました。

榊田 販売で予算を自分のところで捻出する……。高橋さんのところは学校側、地域の方から申し出があった直売会である程度の予算にはなっているんですね。

高橋 じっくりいい活動だと認められれば、それで金は降ってくるだろうというような思いでやってきましたが、なかなか降ってきません(笑)……。やっぱり子供たちの純粋な笑顔の前でまず一年間過ごせれば最後に救われるなあという部分があるので、お金のことは、事業を進めるのに当然必要ですが、あまり気にしていません。内情は厳しいですけども。

榊田 あまりお金にこだわりたくないとのことですが、どうやって継続していくかと言う問題もあると思います。どういうことをやっていかないと次の人たちにバトンタッチができないかなあと思っていらっしゃるのでしょうか。

藤本 藤本先生がすると全部米作りなの？というのを言われます。そうではなくて、ただ自分の反省として心掛けているというのは、5年生になったら米作りするんだらうなあ……みたいなこと、そういうのは少し学校の中に残しておくということが必要なのではないかと。実は学校というのは実績があれば、教師というのは……教師というのは善人なんですよ。子供が学んでいるとか、興味を持っているとか、賢くなったとかわかれば、誰でもやりたくなるんですよ。だから最初は、初期の投資は大変で熱意でやるんでしょうけれど、1回実績ができれば学校でも微々たるものでも予算として残したり、これはいいという考えができていくので、学校の中で農業体験の校風みたいな風土みたいなものを心掛けて作っていきたいと思います。もうひとつが先生方に「ああ、いいものだな」と思ってもらいたい。教室から出るからやりにくい、子供が何を言い出すかわかりにくいとか、田植えしているのにカエルに興味を持ってしまったら困るみたいな話があるじゃないですか。それでも、まあやってみたらいいんじゃないの？ということで僕はできるだけ行った学校で授業をやってきて、職員室で声を出してみます。「職員室の中心で食を叫ぶ」と僕は言っているんですけどね。こんなこと面白かったですよ、〇〇ちゃんはこんなこと見つけましたよとか、さかんに言っていると、農のことにいかななくても、食のことって毎日のことだから、誰か何かは絡んでくるんです。結構言ってくれるんですよ。それをきっかけに地域に繋がって行ってゲストティーチャーが見つかったり。そういうことを心掛けていますね。

■継続していくには

榊田 理解者を増やしていくということですね。農業者サイドとして次の方たちにバトンタッチしていくために心掛けていること、継続していくためにここをなんとかしなきゃと思っていることがあれば…。

霍田 タイミングというのがありますよね。どんなにこちらの農業サイドが頑張ってもむこうに受け流されたら何もなりませんし、学校サイドから来られてもこちらもやり手がなかったらだめだし。たまたま昨年の5年生の総合の時間というのはものすごく話が噛み合ったものだから、スタートしたんですね。総合の方が人的な負担も低いし、費用も問題もあまりかかりません。今私が思っているのは、例えば小学校3, 4, 5, 6年生であれば1年間にひとり張り付けてやっていかなければ、中学校に繋がらないということです。なぜかというとな5年生でやりますけれど、6年生ではやりませんので、尻切れトンボになっていくのです。反対に言えば小学校でやるのであれば幼稚園から刷り込んでいかないと、いかなんと。それをやっていけば、システムを作ればそれ程負担が掛かることはないので、いいんじゃないかなと思っています。

榊田 システムとしても作っていくということですね。

高橋 青年部の方はなんとか回っていくと思うのですが、やはり学校サイドの方では…。さっき申しましたように100校にダイレクトメールのはがきを出して、手挙げてくれた学校というのはやっぱり名物校長だったり、名物担任だったりいるんですよ。そういうふうな先生というのは異動ありますから、その先生がいなくなったら終わりという可能性も無きにしも非ずなんですよ。だからそのところを解消していただくために5年生の授業のプログラムとして今回新宿の学校は完全に組んでいただいています。今年5年生が1年間やって困った点を洗い出して、うまく4年生に繋ぐという授業展開をされているようです。実際、自分たちが一番苦労したことは何かというと虫食いです。無農薬で栽培やっているものですから虫がいっぱいつく。子供たちが農薬賛成派と無農薬派で分かれて議論するんですね。自分たちでいろんなことを調べて発表会などをやっている部分で稲作り以外にも学習をしているというのは非常にいいことだと思います。5年生が4年生に繋ぐといういい流れもできているので、そういう学校はある程度安心して見ていられるのかなあとと思っています。しかし全ての学校がそうなっているというわけではないので、やっぱり先生が代わってしまうと大変なところがあるのかなあと正直なところと思っています。

榊田 システムとして残してくれればやる方も安心してできるということですね。

霍田 今の意見もちろんですけど、反対にうちの先生のような方がいらっしやったら、2年くらいである程度固定化させて、きちっと作ってしまえばその人がどんどん動いてもらった方がいいです。うちの先生に「そろそろ異動しないですか？」という話をしている、今度はそこでやりましょうと。あんまり熱く燃えてやると続きませんので静かに肅々と続けばいいと思っています。

■中学生の農業体験をどう進めるか

榊田 奈須先生、今の中学校の農業体験の位置づけて希薄な部分があると思うのですが、その部分の位置づけをどうお考えなのでしょうか。

奈須 同じ農業、同じ米を作っても学年とか発達の段階によって学ぶことが違いますよね。中学校の年齢だからこそ気付くこともあります。もっと教科の内容との結びつき、もっと科学的な目線から農家が知っている知恵の価値を見定めていきます。教科の勉強をもっとやっつけていこうという気にもなるし、そういうことに対処できていない、人々の知恵のようなものも同時にわかってくる。それを繋ごうとしていこうとなります。

中学校になると、将来展望、職業的なアイデンティティというものを建設する段階で、いろんな働くということそのもの、あるいは働くいろんな職種や産業に対して仕事として関心を持ち始めます。中学の場合、労働、勤労ということがタグにあってももちろん、職場体験とはやられています、その視点で見るとは非常に大事だなあと。いろんな産業、いろんな職場によって学び取られることも違って来るはずで。農業だから見えることって絶対あるはずで、それがすごく中学校では格別な意味になってくるかなあとは思いますがね。職業体験をやろうというのは中学全般の話なんですけど、その中で農業や第二次産業の体験は欠かせませんよという強い打ち出しをするためにね。

榊田 二次産業三次産業では気付かなくても農業体験だからこそ学べることですね。鶴田さん、実際に中学生とやっつけていっしょやる職場体験で、中学生だからこういうところというのを考えたところがありますか？

霍田 保育園の田植え、小学校の田植えは、目が生き生きしているんですね。ただ中学生になると……。当然だと思いますね、思春期で。ただ一貫性というのはものすごく大事になるんじゃないかなと思うんですよね。

■学校と農業者側が共有できるビジョンとは

榊田 最初に学校側と農業側の目的が同じであれば、総合学習のような形で一緒にやって

いった方がいいというお話がありました。同じに持てる目的というのはどの辺りにあるのか、
どういうビジョンが必要なのでしょうか。農業サイド、教育サイドが共有できるビジョンですね。

藤本 実は農業体験だからできることって、高齢者が素敵だっていうことであると思います。
歳を取ることが素敵であって、みんな歳を取っていく、この子たちも歳をとっていく。共有できる
ビジョンは自分の子供、子育てを考えていくことじゃないかと思っているんですね。そうした
ら地元の力を使って地元の子を育てるということは、結局地域で子供を育てることを考えた時
にいろんなことが解決していくんじゃないでしょうか。それがみんなの共通項になって、だっ
たら役割があるじゃないですか。農家ができること、教師ができること、JAの方ができること。
ちゃんと自覚できるんじゃないでしょうか。この地域で子育てをしたいな、これが共通項になるん
じゃないかなと思いますね。

霍田 まったく一緒です。一番の問題は食と農はイコールになっていないんですね。例えば
パレードとかでこちら辺を闊歩して歩いても、見ている人何人かだと思います。本来であれば
食べている人がやるのが筋かな、自分たちが食べるのがなくなるわけですからね。でもそこ
はそういう結論に至っていないんですね。だからみんないろいろやってきたと思います。た
だなかなか人間が1回できてしまった大人に言っても効果が見えない。だったら最初から幼稚
園、保育園、小学校、中学校と。いい意味でしっかりした刷り込みをやっていけば自ずと結果
は出てくるのではないのでしょうか。

高橋 私は稲作をやっているので米作りを教えに行っているのですが、私がやりたいことは
米作りを通して食文化だったり、食習慣だったりを教えることです。学校側もただ稲作りのた
めに来てもらっているだけではないと思うんですね。私たちが目標にしている気持ち的な部
分も子供たちがわかって欲しい、わかった子供たちに成長して欲しいという部分もあって、学
校側も受け入れてもらっているのかなあというのがあります。ただ単に私たちが言った作業を
するだけじゃなくて、いろんな苦労話とか収穫の喜びとか、そして問題にぶち当たってみんな
で解決していこうという学校が実際にありますので、そこがお互いの接点になっていくのかな
と思っています。

奈須 子供は消費者としていきなりこの世に出てきちゃう時代になりました。それをやっぱり
変えないとまずい。僕流に言えば、消費するだけではなくて、それが生産、流通とぐるっとひと
つの輪になっているということがわかった子供になってほしいなと思うんですね。農はそれが
すごくわかりやすいし、一番切実だと思います。小さい時から、何かを消費する時に生産した
人がいて、生産する時にそこに土地があって自然条件があって労働があってということが感じ
られる子供にするということがすごく大事だろうと思います。経済活動を伴うのでそこに便宜
上お金を介在させている、お金って結局それだけのものでしょうか？と思うことがすごく大事だと

思いますね。そうなった時に食とか農ということがみんなの意識の中に根ざすのじゃないかなあと。大変だろうけど時間を掛けてみんなで頑張っていきたいなあと思います。

榊田 文部科学省の食育は生活習慣の問題をいちばんトップに出されているわけですがけれども、それだけじゃないというところを農業体験も含めて考えていきたい……。

奈須 学校関係者は大人も含めて生産ということは見えていません。食べ物はお店に売っているもので、お店に売っているものを適切に購入して選択して食べられるというふうにしが見ていないです。だから先生方にも変わってもらわないといけない。それに対してすごく強く農業関係者から働き掛けていただくとありがたいと思います。

■今後の展望について

榊田 最後にパネラーの方たちにひと言ずつお願いします。

高橋 地元に帰って地元の仲間とまた一緒に地域の活動、東京での出前授業、これからも継続していければなあと思います。

霍田 粛々と進めていきたいなあと思います。とにかく何回も言いましたが、協力し合いながら、お互いやってあげればいいんじゃないかと思います。あまり肩肘張って食農教育をやったという感じではなかなか難しいので、そういうことを念頭に置きながら取り組ませていただきたいと思います。

藤本 農の持つ教育力をもっと自覚していただきたいということ、それに自信を持って語っていただきたい。それでしたたかに戦略を持って粛々と進めていただきたいということだと思います。

奈須 学校関係、農業関係両方にとっていい関係で考えていくことが大事なんだと思います。教育も変わろうとして、変わりたいと思っています。最後悩みどころ、過渡期にあると思います。農業も悩んでいる、変わろうとしている、両方とも苦しい状況。だからこそポジティブに、前向きにやれるところからとにかく始めていくということだと思います。今日はこれをそれぞれが持ち帰って、それぞれの持ち場でできることというより、やりたいことをどんどんやっていきたいと思いました。

榊田 どうやって継続していくか、何と連携していくかという視点でお話をいただきました。大事なものは子育て、育てるといって皆さん親の世代の視点ではないかというお話になりました。こ

の世代の方たち、子育てでもいちばん実感を持たれていると思いますので、ぜひこの世代の方たち、若い世代とも連携して、何か一緒に地域の中で子供を育てるという連携がこれからあちこちで生まれると楽しいなと思います。今日は長い間お付き合いいただきましてありがとうございました。